Pudd'nhead Wilson における David Wilson の社会的成功の意味

── Dawson's Landing の虚像と実像 ──

筑　後　勝　彦

I　序論

Pudd'nhead Wilson が寓話的，寓意的な側面を備えた作品であることは周知の事実である．この作品に関する研究は1950年代以降盛んになったが，すでにこの当時から，作品のそういった特質は Leslie Fiedler や Henry Nash Smith らによって指摘されていた．Fiedler は架空の町 Dawson's Landing を "mythicized Hannibal for the first time from the *outside*"[1] として捉え，同時に，にせの Tom Driscoll を寓意的存在と見なしているし，Smith は Roxy 以外の登場人物が皆，寓話的であると考えている[2]．その後も，この二人の批評家の後を追うようにして，Louis H. Leiter, Mark Coburn, Michael Ross といった批評家が次々に Dawson's Landing の寓意性を指摘し[3]，1975年には John C. Gerber が作品全体を構造的，包括的に捉え，次のように述べている．

> Criticism of *Pudd'nhead Wilson* seems to have come to a dead end. . . . I should like to suggest that almost all of the criticism proceeds from the wrong premise, namely that *Pudd'nhead Wilson* is a novel and therefore must be measured primarily by the standards of realism.[4]

Pudd'nhead Wilson に対する評価がいまだ定まらない当時の批評界にあって，Gerber はこの作品が "novel" として論じられるべきものではないと断言し，

Pudd'nhead Wilson 研究に確固たる指針を与えようとしたのであった．この論文で Gerber は，作者 Mark Twain が作品中に顔を出して町の様子を説明したり，登場人物の人物像を規定していること，作品中の世界が非現実的な出来事に満ちた想像上の世界であることを詳しく論じ，こういった特徴が，外的世界を精密に描き出したり，登場人物の内的世界を詳細に分析したりするリアリスティックなノベルには見られない "fabulation"[5] 特有のものであると明言している．Gerber のこの見解は後の研究者たちに影響を与え，近年に研究においては，Andrew Jay Hoffman, Eric J. Sundquist[6] といった批評家が *Pudd'nhead Wilson* を寓話的，寓意的な作品として扱っている．そして，こういった立場に立つ批評家は，皆一様に作品の非現実性の中に普遍的な真実を見出してきた．たとえば，Gerber 自身は *Pudd'nhead Wilson* が "Life . . . is a purposeless absurdity in which the men and women simply play out their destined roles."[7] という形而上の真実を具現した作品であると述べているし，Hoffman は町の住民に対して拘束的な力を持つ Dawson's Landing という非現実的な世界が，「状況」の中に個人が縛られる現代社会を象徴しているという実存主義的な解釈を加え，Huck Finn や Hank Morgan と違い，自分の置かれた「状況」の枠内で成功で収めた David Wilson こそ "a true hero"[8] であるという結論に達している．

実際，Dawson's Landing はアメリカ南部の貴族主義をそのまま人格化したような the F. F. V. (the First Families of Virginia) や彼らの価値基準を何の疑いも挟まずに受け入れる画一的な住民によって構成されている上に，現実には起こり得ないような偶然が次々と重なってゆく非現実的な世界であり，*Pudd'nhead Wilson* に寓話的，寓意的な解釈を加えることは極めて妥当である．しかしながらその一方で，この作品は寓話的，寓意的側面の他に，リアリスティックな側面も持ち合わせているように思われる．私は Dawson's Landing やそこで生活する主な登場人物たちが，実は表と裏の二つの顔を有しており，非現実的とも取れる社会の表層部分の裏側には暗い現実が

隠されていると考える．そこで本稿では，これまで多くの批評家が指摘してきた作品中の寓話的要素に注意を払い，にせの Tom と Wilson を象徴的存在として捉えると同時に，Dawson's Landing 内に見られるそういった二面性を明らかにしてゆき，最終的に，その二面的な社会の中で，にせの Tom を破滅させることによって Wilson が揺るぎない成功を収めるという作品の結末が，どういったことを暗示しているのか探ってみたい．

II　Dawson's Landing の二面性と Tom の反社会性

にせの Tom Driscoll（以下 Tom と呼ぶ）は悪の化身とも言うべき存在である．Tom はこの世に生を受けて以来，悪の限りを尽くし，社会的見地から見ても，道徳的見地から見ても，到底許すべからざる罪を犯す．まず第一に Tom は金銭に対して異常なまでの執着心を持っており，それがために数々の悪事を重ねる．一攫千金を夢見て賭博に手を出し巨額の借金を抱え，その返済のために町中で盗みを働いたあげくに，自由の身である実母 Roxy を川下に売り飛ばしてしまう．また，並々ならぬ愛情を注いでくれた養父 Driscoll 判事に対しては，その愛情に応えるどころか，その財産を虎視耽々と狙い，最終的に自らの手で死に至らしめる．さらに，身体的に虚弱で臆病な Tom は，人前で溺れている自分を救って恥をかかせたという理由によって兄弟のように育った奴隷の Chambers（本物の Tom）を激しく憎悪し，ナイフで刺し殺そうとしたり川下に売り飛ばそうとしたりする．Luigi に蹴とばされ名誉を傷つけられた際には，"the code of the F. F. V." に従って決闘を申し込むことに尻込みし，Driscoll 家の名声に泥を塗る．Tom は全く反社会的，反道徳的な存在である．では，どうして Tom はこのような悪しき存在として描かれているのであろうか．Leslie Fiedler はその論文の中で次のように述べ，この問題に対する答えを示唆している．

Perhaps the supreme achievement of this book is to have rendered

> such indignities not in terms of melodrama or as a parochial "social problem" but as a local instance of some universal guilt and doom. The false Tom, who is the fruit of all the betrayal and terror and profaned love which lies between white man and black, embodies also its "dark necessity"—and must lie, steal, kill, and boast until in his hybris he reveals himself as the slave we all secretly are.[9]

Fiedler は決定論的な立場から Tom の悪しき行為の説明を試みている訳だが，最も大切なのは彼が Tom を単なる一個人としてではなく，寓意的ないしは象徴的存在として捉えている点である．Tom の反社会的，反道徳的行為は単に Tom 個人の問題として片付けられる類いのものではない．Tom の悪行が運命づけられたものかどうかは別問題として，Tom は明らかに人間や社会の奥に潜む暗い面を背負わされ，作品中寓意的ないしは象徴的存在として重要な役割を果たしていると考えられる．

the F. F. V. に属する人たち，Roxy, Wilson といった作品中の主な登場人物，そしてさらに，Dawson's Landing と呼ばれる架空の社会は皆一様に二面的な性質を持っている．"Those Extraordinary Twins" の中ではシャム双生児として描かれている双子の兄弟 Angelo と Luigi が"the Angelic" と "the Luciferian" を暗示し，光と影のような全く逆の性質を兼ね備えているように，そういった主な登場人物たちやその集合体としての社会もそれぞれ自分自身の中に正反対の二つの顔を有している．そして，それらの一方の顔である表面的な性質や状態は，物語の冒頭部分で事細かに説明がなされている．まず，語り手は Dawson's Landing のどれも似通った小綺麗な家の様子を詳細に述べ，それから次のような注釈を加えている．

> When there was room on the ledge outside of the pots and boxes for a cat, the cat was there—in sunny weather—stretched at full length, asleep and blissful, with her furry belly to the sun and a paw curved

over her nose. Then that home was complete, and its contentment and peace were made manifest to the world by this symbol, whose testimony is infallible.[10]

さらに，語り手は次第に巨視的に町を眺めてゆき，最後に社会全体の状況を次のように締め括る．

Dawson's Landing was a slave-holding town, with a rich slave-worked grain and pork country back of it. The town was sleepy, and comfortable, and contented. It was fifty years old, and was growing slowly—very slowly, in fact, but still it was growing.（4）

次に主な登場人物の人物像が規定される．語り手は the F. F. V. に属する人たちの性質を"fine," "just," "generous," "brave," "majestic"（5）という語によって説明し，これらの人たちが家系の名誉を何よりも重んじ，その家系及び血筋ゆえの属性によって町の人々から尊敬を集めている紳士であることを付け加え，一方，16分の1だけ黒人の血を引く Roxy が白人の前では "meek" そして "humble"（8）な奴隷であるということを述べている．以上のような解説によって我々は Dawson's Landing の表層的な状況を把握することができる．Dawson's Landing は表面的には明るい社会である．この町は血筋あるいは家系によって各人が社会的なアイデンティティーを与えられている封建的な社会ではあるが，the F. F. V. の価値基準がそのまま町全体の社会規範として受け入れられているために平和で安定した状態が保たれている．そして，そういった平和な社会は猫に象徴される平和で満ち足りた家庭の集合体として存在している．また，Dawson's Landing はフロンティアに近い西部の町として少しずつではあるが確実に成長を続けている．

以上のように Dawson's Landing は一見平隠な社会である．しかし，これはあくまで社会の表層的な状況であり，この町はその深層部に社会の表面に

は現れない暗い影を内包している．the F. F. V. たちがそのよい例である．彼らは前述のような立派な美徳を身につけた自他ともに認める紳士であるが，そういった仮面の裏側には全く別の顔を隠し持っている．Essex 大佐は Roxy との間に性的な関係を結び一子を儲けるが，恐らくは自分の家系の名誉と血の純潔を守るために，そういった事実を公言することもなく，生まれた子供を平気で奴隷の身分にしておく．もっとも，このような恥ずべき行為も白人中心社会では罪とはならない．Percy Driscoll は自分の奴隷たちを川下にではなく，Dawson's Landing 内で売却したことを寛大で人道的な行為であると考えている．彼はまた，金銭欲にとり憑かれて投機に熱中し，莫大な借金を抱え健康を害して死んでしまう．Driscoll 判事も夜一人きりになると財産の計算に余念が無く，選挙の際には Luigi を失脚させるために不正な金をばらまく．さらに，決闘を恐れぬほど勇敢であるはずの判事も，夜，Tom が変装して金を盗みに部屋の中に忍び込んで来ると，"Help! help!" (94) と騒ぎ立てる．the F. F. V. たちは立派な紳士の仮面をつけてはいるが，実際は血による優越性，血の純潔という観念，金銭欲にとり憑かれた，冷酷で，非人道的な人間たちであり，"the code of the F. F. V."に従った名誉のための決闘も彼らの卑劣で臆病な面を隠すための隠れ蓑でしかないのである．一方，Roxy も白人の前では従順で謙虚な奴隷であり，白人の血の優越性を信じて疑わないが，心の奥底では自分たち母子を財産として所有し，子供をいつか川下に売り飛ばして家族の絆を断ち切ってしまうかもしれない白人に対し，恨み，憎しみ，復讐心を抱いており，さらに，そういった悲しい運命を背負わせた社会を呪っている．Roxy は愛情ゆえに我が子を白人に仕立て上げるが，この行為を裏返せば，そこには白人の子を奴隷の身分にして，白人の平和で幸福な家庭を崩壊させてしまい，社会秩序を乱そうとする無意識的な恐るべき復讐行為が潜んでいる．また，Roxy たち奴隷は，白人の持ち物をくすねることを罪であると考えないが，これは自分たちが白人によって "an inestimable treasure" (12) である自由を奪われていることに対する形

ばかりの復讐行為であったと言える.

このように，作品中の主な登場人物たちはそのペルソナの下に全く別の暗い顔や悲しみに満ちた顔を隠し持っている.それは個人的なものであったり，Dawson's Landing 内では認識できない集合的なものであったりするが，いずれにしても，この町の表面的な明るい顔の裏側にはこういった暗い影が蠢いている．そして，その暗がりの中から生れ出た Tom は明らかに社会の暗い面を背負わされている．Tom は Dawson's Landing の人々のマイナス面を人格化したような存在であり，そういったマイナス面を外界に向かって発現する．すなわち，the F. F. V. と黒人奴隷の血を引く Tom は，白人の代表的存在である the F. F. V. の影[11] として彼らの醜い真の姿をさらけ出すと同時に，"Why were niggers *and* whites made? What crime did the uncreated first nigger commit that the curse of birth was decreed for him?" (44) と言って黒人の心の奥深くに潜在する悲しみを代弁し，さらに，語り手自身が Roxy の密かな心情を "This was her son, her nigger son, lording it among the whites and securely avenging their crimes against her race." (22) と述べて暗示しているように，Roxy の服を着て女装し彼女の影として，顔を黒く塗り黒人奴隷たちの影として白人たちに復讐するのである.

Ⅲ　Wilson の社会的成功

Pudd'nhead Wilson は David Wilson と Tom Driscoll の対立という構造によって成り立っていると言うことができる．Tom の誕生とほぼ時を同じくして Dawson's Landing に到着した Wilson はその日のうちに，姿を隠した犬に激しく吠え立てられ，"I wish I owned half of that dog." (5) さらに，"Because, I would kill my half." (5) という意味不明の言葉を口に出したため，町の人たちから "pudd'nhead" という-あだ名をつけられ社会的成功への道を閉ざされてしまう．この言葉は恐らく白人と黒人という二つの顔を持った Tom が町全体に襲いかかってくることに対する無意識的な警告で

あったと考えられるが，町の住民がそんなことに気づくはずもなく，この警告は無視され，Wilson は社会から冷遇される．その間，元来奴隷であるはずの Tom は the F. F. V. の後継ぎとして持てはやされ，同時に，これまで論じてきたように社会に潜む影として次々に悪事を重ねる．しかし，23年後に，Tom は Wilson によってその正体を暴かれ，社会から永久に抹殺されてしまう．そして，逆に Wilson はその功績により揺るぎない名声を獲得する．Wilson と Tom は互いに人生を左右し合い，正反対の運命を辿る訳である．それでは，このような対立構造，特に，Wilson が Tom を社会から抹殺して揺るぎない成功者となるという結末によって，この作品は何を暗示しているのであろうか．

Wilson は様々な可能性に満ちた19世紀中葉のアメリカ社会を代表する人物であるかのように見える．彼は社会的成功を求めて Dawson's Landing にやって来たにもかかわらず，社会から受け入れられず不遇の日々を送るが，23年の後に民主党から市長に立候補して見事に当選を果たし，成功の夢を叶える．さらに，Driscoll 判事殺害事件の裁判の際には Luigi 被告の弁護人として，Tom が真犯人であることを長年にわたる指紋の科学的研究の成果によって立証し，社会に正義をもたらす．同時に，the F. F. V. に属する検事 Pembroke Howard を打ち負かしてその成功を確かなものとする．そして，このことによって Dawson's Landing の社会状況は大きく変化する．the F. F. V. 最後の生き残りとなるはずの本物の Tom は，長年奴隷として生きてきたため，奴隷らしさを捨てることができず，the F. F. V. としてはやってゆけそうにもない．Dawson's Landing は Wilson によって the F. F. V. の貴族的な支配から解放され，新しく生まれ変わる気配を窺わせる．科学による社会の絶え間ない進歩，発展とそこに付随する物質的成功．Wilson はこういった楽観的で希望に満ちた19世紀中葉のアメリカ社会の時代精神を体現する人物であるかのようである．しかし，実際のところ，Wilson は虚飾に満ちた社会の表面的な明るい面を表しているにすぎない．少なくとも，そう

いった表層的な面を代表する人物に変化してしまう．

Wilson はアメリカ東部の出身であり，Dawson's Landing の社会的な因襲に対しては元来批判的である．たとえば，彼は自作のカレンダーの中に次のような警句を書き記している．

> Consider the flea!—incomparably the bravest of all the creatures of God, if ignorance of fear were courage. . . . When we speak of Clive, Nelson and Putnam as men who "didn't know what fear was," we ought always to add the flea—and put him at the head of the procession. (57)

Wilson は Clive，Nelson，Putnam といった英雄たちを蚤と比較することによって，Luigi との決闘に尻込みする Tom を叱責し自ら決闘に臨む Driscoll 判事の恐れを知らぬ勇敢な態度を嘲笑している訳である．しかし，彼は社会に向かってそういった本音を吐くことはない．彼は弁護士として社会的成功を収めるために Dawson's Landing にやって来たのだが，前述のように意味不明の言葉を口に出したため，社会から疎外されてしまう．後にカレンダーの中に，"Tell the truth or trump—but get the trick."（3）と書き込んで自らを戒めていることからも分かるように，彼は町の人々の前で重大な警告を発したにもかかわらず，時機が悪く，要領を得なかったために失敗してしまったのである．この苦い経験によって彼は，成功を収めるためには町の人々の尊敬を勝ち取らなければならないことに気づく．そして，Eberhard Alsen が言うように，ここから彼の "quest for popularity"[12] が始まる．彼は Dawson's Landing に溶け込み，人々の人気を得るため，社会の因襲を尊重するふりをする．Luigi に名誉を傷つけられた Tom が決闘を避けて裁判に訴えたことにより，Luigi の弁護人として初めて司法界に進出することができたのに，彼は Tom に向かって "the code of the F. F. V." に従って決闘しなかったことを非難する．Driscoll 判事と Luigi の決闘の際には，Luigi の

介添え人をつとめ町の人々の称賛を勝ち取る．Driscoll 判事が Tom に唆され，選挙演説で Luigi のことを暗殺者であると仄めかすと，事の真相を知っているにもかかわらず，判事や町の人々の信頼を損ねるのを恐れ，Luigi の弁護をしようとしない．このように，Wilson は真の自己を隠して社会的因襲の擁護者を装い，人々の人気を勝ち取ってゆき，市長の座を獲得する．

こうして市長に就任した Wilson は，Driscoll 判事殺害事件の裁判において人生最大の栄誉を担うことになる．判事殺しの嫌疑をかけられた Luigi の弁護人として，Wilson は真犯人が Tom であることを立証し，同時に，彼がにせの白人であったことを暴露する．この勝利により，検察官として法廷に立った名士 Pembroke Howard を失脚させた Wilson は，the F. F. V. を駆逐して，文字通り Dawson's Landing の頂点に立つことになる．町の人々は彼の栄誉を称え合い，"pudd'nhead" は彼ではなく，実は自分たちだったのだと認める．

> "And this is the man the likes of us have called a pudd'nhead for more than twenty years. He has resigned from that position, friends."
> "Yes, but it isn't vacant—we're elected." (114)

しかし，Wilson は結局 "pudd'nhead" でしかない．否，このとき彼は "pudd'nheads" の親玉になったと言える．Tom は社会の裏に潜む影を映し出す存在である．Tom は20年以上にわたって白人たちの醜い真の姿を社会の表面にさらけ出すと同時に，黒人奴隷の代わりに白人たちに復讐してきたのである．Wilson はこの Tom がにせの白人であることを暴露し，それまでの彼の the F. F. V. らしからぬ悪行をすべて黒人の血のせいにしてしまい，さらに，その復讐の牙を抜いてしまう．それによって，白人の血の名誉が保たれ，逆に，愛情ゆえに我が子を白人に仕立て上げ，結局その子を復讐の刃として操り，破滅させてしまった Roxy は，その罪の深さを知り心に大きな痛手を負う．かつて教会の教えによって盗みを思いとどまったように，

彼女は再びその身を教会に委ね，白人に対して従順な黒人に戻る．こうして Dawson's Landing には再び平和が蘇る．しかし，言うまでもなくこれは表面的なものでしかない．町の人々は Tom が自分たちの醜い面を表しているということにも，奴隷たちの抑えつけられた本当の姿を表しているということにも全く気づかない．Wilson は社会の裏側に潜む影を暴き出そうとする Tom を抹殺することによって社会にうわべだけの平和を回復し，自分たちの社会の実体に全く気づかない "pudd'nheads" の頂点に立ったのである．

Dawson's Landing は少しずつ成長を続けるアメリカ南西部の町である．この町は誕生してから73年目にしてようやく市に昇格し，新しい時代の幕開けを感じさせる．しかし，そういったたゆまぬ進歩にもかかわらず，この社会は実質的には何も変わっていない．東部からやって来て，ただ一人 Dawson's Landing の本質を見抜くことができた Wilson も，社会的成功を手中に収めるため，社会の暗い影には目をつぶり，その社会の古い因襲を受け入れる．Wilson の市長としての地位は社会の因襲を基盤にしている．そのため物語の結末では，白人の地位を奪われた Tom が公然と財産化され，川下に売られてしまう．Dawson's Landing はこれからも平和な社会として少しずつ発展してゆくであろうが，そこに住む人々の心は変わることがなく，社会の裏側に潜む影も決してなくなりはしないに違いない．そして，こういった状況こそが表面的には明るく平和な Dawson's Landing の実体であり，同時に，Walter Scott らのロマンスを拠り所として自分たちの生活様式を正当化し，さらには自己を "Scott's courageous and honorable feudal lords and Scottish chiefs"[13] と同一視した南部の貴族たちが，その貴族主義の華やかな理想の下に支配を続けた南部諸州の実像，そして，社会の進歩，発展に付随するはずの物質的成功の夢によって道徳的に腐敗していった19世紀アメリカ社会の真の姿もである．

Ⅳ 結論

Mark Twain は *Adventures of Huckleberry Finn* において，社会的な規範や成功といったものには囚われない自然児 Huck Finn を創造した．そして，次作 *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* では，科学的知識と技術を駆使して人々を教化すると同時に既成の封建的な社会規範を打ち破り，理想的な共和国を樹立することによって成功を収めようとする Hank Morgan の姿を描き出した．しかし，Hank の進歩主義的な理想に基づいた改革は失敗に終り，*Pudd'nhead Wilson* ではこれまで論じてきた通り，虚飾に満ちた社会の因襲を受け入れることによって名声を勝ち取る人物，David Wilson を描くに至った．というよりも，むしろ彼はそういった人物を描かざるを得なかったのではないか．*A Connecticut Yankee* の中で Hank の改革の失敗を通して示したように，当時 Twain は人間が社会環境の前では無力な存在でしかないということを覚っていた．それと同時に，その頃社会に広く行き渡っていた，テクノロジーによって社会が進歩，発展するという希望的な観測に対しても否定的になっていたと考えられる．結局，人間は既成社会の枠内で，その社会規範に従って生きてゆかなければならないのである．しかも，自身の人生が示すように，Twain は人間が生きている限り人生の成功を追い求めざるを得ない存在であることを知っていた．だからこそ Wilson は人々から不当な扱いを受けても決して Dawson's Landing を逃げ出さない．彼はカレンダーの中で，"When I reflect upon the number of disagreeable people who I know have gone to a better world, I am moved to lead a different life." (61) と述べながらも，結局社会の因襲を受け入れ，敢えて "pudd'n-heads" の頂点に立つ．しかし，Wilson はそういった社会の因襲に心から賛同している訳ではない．彼のカレンダーの中の悲観的な警句，"October 12, the Discovery. It was wonderful to find America, but it would have been more wonderful to miss it." (113) はそういった Wilson のジレンマをよく

表している．Wilson は底抜けに明るい社会の実像を知っていたにもかかわらず，社会的成功を収めるため，その表面的な明るさの裏側に確実に存在する暗く悲しい面を見て見ぬふりをしなければならず，市長となって社会の頂点に立った後は，その地位の基盤である社会の因襲を擁護し，社会のうわべだけの平和を守ってゆかざるを得なかったのである．Wilson はカレンダーの中に次のように記している．

> Whoever has lived long enough to find out what life is, knows how deep a debt of gratitude we owe to Adam, the first great benefactor of our race. He brought death into the world. (12)

この言葉には，虚偽に満ちた社会の中で成功を追い求めざるを得なかった Wilson の人生の空しさや悲しさが滲み出ている．そして，Wilson を取り巻く寓話的で馬鹿げた人々や Dawson's Landing の見せかけだけの明るさが，その空しさや悲しさを人生の普遍的な要素として一層際立たせている．

注

1　Leslie Fiedler, "As Free as Any Cretur . . . ," *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordiany Twins*, ed. Sidney E. Berger (New York: W. W. Norton & Company, 1980), p. 223.

2　Henry Nash Smith, "*Pudd'nhead Wilson* as Criticism of the Dominant Culture," Sidney E. Berger, p. 252.

3　Andrew Jay Hoffman, *Twain's Heroes, Twain's Worlds* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1988), p. 169.

4　John C. Gerber, "*Pudd'nhead Wilson* as Fabulation," Sidney E. Berger, pp. 360–61.

5　"fabulation" という語について Gerber は次のような説明を加えている．

The term . . . so plainly places the emphasis on the fable or story, not on careful documentation of the outer world or on detailed analyses of the characters' inner worlds. (John C. Gerber, p. 361.)

6 Eric J. Sundquist, "Mark Twain and Homer Plessy," *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson,* ed. Susan Gillman and Forrest G. Robinson (Durham and London: Duke University Press, 1990), pp. 46–72.

7 John C. Gerber, p. 370.

8 Andrew Jay Hoffman, p. 184.

9 Leslie Fiedler, p. 227.

10 Samuel Langhorne Clemens, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins,* ed. Sidney E. Berger (New York: W. W. Norton & Company, 1980), p. 3. 以下この作品からの引用はすべてこの版によるものとし，末尾の括弧内にページ数を記す.

11 「影」という語を使う場合，私は C. G. Jung の言う「影」を念頭に置いている. C. G. Jung は「影」を "the 'negative' side of the personality, the sum of all those unpleasant qualities we like to hide" ("On the Psychology of the Unconscious," *Two Essays on Analytical Psychology,* trans. R. F. C. Hull [Princeton: Princeton University Press, 1966], p. 66, n. 5)と定義し，さらに次のような説明を試みている.

True, whoever looks into the mirror of the water will see first of all his own face. Whoever goes to himself risks a confrontation with himself. The mirror does not flatter, it faithfully shows whatever looks into it; namely, the face we never show to the world because we cover it with the *persona,* the mask of the actor. But the mirror lies behind the mask and shows the true face. (*The Archetypes and the Collective Unconscious,* trans. R. F. C. Hull [Princeton: Princeton University Press, 1969], p. 20.) もちろん，影には個人的なものの他に集合的なものも存在し，人格化された形で現れることもある.

12 Eberhard Alsen, "Pudd'nhead Wilson's Fight for Popularity and Power," Sidney E. Berger, p. 331.

13 Ritchie D. Watson, "Frontier Yeoman versus Cavalier: The Dilemma of Antebellum Southern Fiction," *The Frontier Experience and the American Dream,* ed. David Mogen, Mark Busby, and Paul Bryant (College Station: Texas A & M University Press, 1989), p. 107.